

じ しん
地震



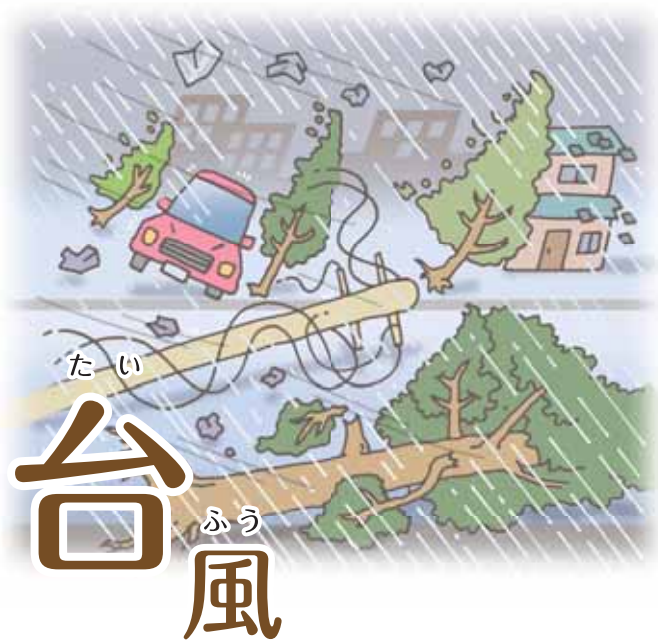
ふん
噴火



さい がい かた
災害を語りつく

こん なん
～困難を生き抜いた人々の話～

全11話



はじめに

日本は地震、津波、洪水などの自然災害の多い国です。

ここに生まれ育ったわたしたちは、いつ起きるかわからない

災害からできるだけ身を守るようにすることが必要です。

また、被害を受けたときには、お互いに助け合い、励まし合うことも重要です。

ここに取り上げた物語は、昔からいままで大きな災害にあいながらも、災害にめげず、苦しみや悲しみを克服して、災害から立ち直る努力をした人たちの実際にあったお話です。

こうしたお話から、わたしたちも災害にあった時の心がまえを学ぶようにつとめましょう。

平成24年3月

伊藤 和明

北原 糸子

清水 祥彦

平野 啓子

元「災害教訓の継承に関する専門調査会」

※この冊子には、災害の体験を忠実に伝えるために過激な表現が含まれております。

目次

エピソード 1	大阪 <small>おおさか</small> の人が守り続ける津波碑 <small>つなみひ</small> 1
エピソード 2	“身の終わり” <small>みのお</small> （美濃・尾張 <small>みのおわり</small> ） 3
エピソード 3	火災から町を守った神田 <small>かんだ</small> っ子 <small>こ</small> 5
エピソード 4	107歳・帝 <small>てい</small> さんの証言 <small>しょうげん</small> 7
エピソード 5	戦争に消された大震災 <small>だいしんさい</small> 9
エピソード 6	非常時 <small>ひじょうじ</small> の大きな決断 <small>けつだん</small> 11
エピソード 7	よみがえった鎌原村 <small>かんばらむら</small> 13
エピソード 8	泥流 <small>でいりゅう</small> に埋まった村 <small>う</small> を蘇 <small>よみがえ</small> らせた村長 15
エピソード 9	災害 <small>さいがい</small> がもたらした絆 <small>きずな</small> 日本とトルコ 17
エピソード 10	高校生の献身的な救助活動 <small>けんしんてき きゅうじょかつどう</small> 19
エピソード 11	燃えつくした“風の町”決死 <small>しょうぼうかつどう</small> の消防活動 21
	とあつか さいがい がいよう 取り扱った災害の概要 23
	あとがき 24



エピソード① あんせいなんかいじしんつなみ 安政南海地震津波(1854年)

おおさか 大阪の人が守り続ける津波碑 つなみひ

みやこ つなみ おそ 水の都を津波が襲う

江戸時代の終り、1854(安政元)年12月24日、
おおさか 大阪の町中を津波が襲いました。大阪は「水の
都」といわれ、町の中を何筋もの川が通り、川に
はたくさんの橋が架けられていました。

津波は港の大船を川筋に沿って押し上げ、川
の小舟に避難していたたくさんの人々の命を
奪いました。これは、四国沖の海底で発生した

大規模な地震によって引き起こされたもので、
安政南海地震津波と呼ばれています。

この5ヶ月ほど前の7月9日にも、三重県伊
賀上野で内陸直下型の地震が発生しました。
大阪でもかなりの揺れを感じましたが、この
時は多くの人々が川舟に避難して無事でした。
その経験から、12月24日の地震の時も7月の

おおつなみ 江戸時代大津波が起こった年

1707年 ほうえいじしんつなみ 宝永地震津波

1854年 あんせいとうかいじしんつなみ 12月 安政東海地震津波

同年 あんせいなんかいじしんつなみ 12月 安政南海地震津波



地震の時と同じように、船に避難しようとしたのです。しかし、12月の地震は津波を伴う地震であったため、多くの人々が被害を受けることになってしまいました。

実は約150年前の1707(宝永4)年にも同じように海底地震によって津波が発生、大阪はもちろんのこと、太平洋沿岸に大きな被害を与えています。しかし、江戸時代の終わり頃には、大阪の人たちはすっかり昔の災害の経験を忘れていたのです。

大阪を襲った津波の前日には、駿河湾から紀伊

半島沖の海底で発生した地震によって、津波が駿河湾、伊勢湾、三重県沿岸の町や村、港を襲い、大きな被害が出ました。こちらは東海地域を襲ったので、安政東海地震津波と呼ばれています。

この続けて起きた二つの地震によって静岡県沿岸から九州の太平洋沿岸一帯では、数千人の人々が犠牲になったといわれています。丁度この時には、鎖国していた日本に開国を迫って下田港に停泊していたロシアの軍艦も津波の被害を受けています。

犠牲者の供養と災害の体験を伝える石碑

この津波によって大阪で亡くなった人は341人といわれています。当時の人たちは150年前の津波の経験を忘れたために、再びたくさんの方が亡くなったことを悔やみました。そして、後世の人たちが大阪も津波に襲われることを忘れないように、言い伝えを残すことにしました。それには風雨にさらされて刻んだ文字がわからなくなるののない石に文字を刻んで、多くの方が目につくところに建てておくのがよいと考えました。

その碑文の最後には、これからの人たちがこの悲劇を繰り返さないように、そして、石に刻んだ警告の言葉は薄れてしまうから、毎年墨を入れてはっきりとわかるようにしておくこ

とも刻み込まれています。この石碑は現在、大阪市浪速区幸町3丁目の大正橋東詰北側の歩道にあります。今も地域の人たちが石に刻まれた教えを守り、墨を入れて文字が消えないように石碑を守っています。





エピソード② 濃尾地震(1891年)

“身の終わり”(美濃・尾張)

☞ 震災数え歌

「**一つとせ** 人々驚く大地震 美濃や尾張の
哀れさは 即死と負傷人 数知れず」

この歌で始まる「震災数え歌」が、岐阜県大垣市の「濃尾地震100年記念誌」に記録されました。市内在住の方が親から聞いた数え歌を覚えていたのです。

1891(明治24)年10月28日の早朝、岐阜県美濃、愛知県尾張地方を突然、マグニチュード8.0の巨大地震が襲いました。この地震での死者

は7200人を超え、14万を超える家屋が全壊。世界でも最大級の内陸直下型地震でした。

10番まで続くこの数え歌では、震災の恐ろしさが生々しく歌い込まれています。後に、“地震にあえば身の終わり”(美濃・尾張)と掛詞になったほどでした。

「**二つとせ** 夫婦も親子もあらばこそ あれと
言うまいぶきぶきと 一度に我が家が皆倒れ」

「**三つとせ** 見ても怖ろし土けむり 泣くのも
哀れな人々が 助けておくれと
呼び立てる」

続いて身近な人を助けようとしている様子も歌われています。

「**四つとせ** よいよに逃げ出す間
もあらず 残りし親子を助けんと
もどりて死ぬとは つゆ知らず」

「**五つとせ** いかい柱に押さえられ
命の危ぶきその人は やぶりて連れ出す人もある」



地震発生が朝の6時半過ぎ。朝食時で火気
を使用している家庭も多く、火災により被害
はより悲惨なものになりました。

「六つとせ 向ふから火事じゃと騒ぎ出す
こなたで親子やつれあいや 倒れし我が家 ふせ

こまれ」「七つとせ 何といたして助けよと慌て
るその間にわが家まで どっと火の手が燃え上が
る」「八つとせ 焼けたに思えどよりつけず 目に
見て親子やつれあいや 焼け死ぬその身の悲
しさや」

過去の教訓を活かす

この数え歌で伝えたいのは震災の恐ろしさ
だけではありません。歌の締めくくりには、ボラ
ンティアによる救援活動や、日赤などの医療・救
護活動への感謝が述べられています。

「九つとせ ここやかしこで炊き出しを いた
して難儀な人々を 神より食事を与えられ」「十
とせ 所どころへ病院が 出ばりて療治は無
料なり 哀れな負傷人 助け出す」

この歌には、悲惨な状況を後世に伝え、二
度と同じ悲劇を繰り返さないでほしいという

思いが込められています。そして、震災の様子と
ともに災害時の対応のすべてが七五調で書かれ
ていて、数字のごろ合わせで覚えやすいように
作られています。ラジオもテレビもない時代、
人々は世の中の出来事を覚えやすい数え歌など
にして広く世の中に伝えようとしてきました。この
「震災数え歌」が歌い継がれることにより、私た
ちの子孫もそこから多くの教訓を読み取り、防
災対策に活かすことができるのです。



※負傷人(けがにん)は、この数え歌の中での読み仮名です。



エピソード③ 関東大震災(1923年)

火災から町を守った神田っ子

決死のバケツリレー

東京の中心部に位置する千代田区神田地区は、木造家屋が多く道幅が狭い人口密集地域で、江戸時代から幾度となく大火の被害を受けてきました。

1923(大正12)年9月1日午前11時58分に発生した関東大地震は、ちょうど昼食の支度時ということもあり、多数の火災が発生しました。そしてその火災は、その後3日間にわたって東京の

町を襲い続けました。

神田川に面した神田和泉町と神田佐久間町の一带は、幸いにも町で発生した火災は消し止めることができましたが、周囲から猛火に包まれた延焼がどんどん広がってきました。

まず、お年寄りや幼児等を安全な場所へ避難させて残った住民たちは、断じて一步も退かない決意をもって自衛防火活動に取り組みました。

地震によって水道は断水

していました。そこで、百数十名の住民が団結して、町中のバケツをはじめ鍋釜まで持ち寄り、神田川の水はもとより風呂屋や豆腐屋の水まで利用して手送りのバケツリレーを行い、迫り来る猛火に対して水を灌いで防火活動に努めたのです。

神田佐久間町の一带は、四方のうち南は神田川に面し、北東は不燃建造物が



あるという立地条件や、さらには風向きの影響もあり、奇跡的に一戸の家も焼失することなく約1630戸の家を延焼から守ることができました。

延べ三十数時間にわたる不眠不休の防火活動が続き、疲れて路上に倒れ込む人まで出ましたが、住民たちは自主的に力を合わせて懸命に防火活動に身を投じました。

👉 記念碑が建立される

その後、1939(昭和14)年、東京府(現在の東京都の前身)はここを「町内協力防火守護の地」として史跡に指定し、戦後になってその記念碑が建立されました。碑文には次のように刻まれています。

「この付近一帯は大正十二年九月一日関東大震災のときに町の人々が一致協力して努めたので出火をまぬがれました その町名は次の通りであります 佐久間町二丁目三丁目四丁目 平河町 練塀町 和泉町 東神田 佐久

間町一丁目的一部 松永町の一部 御徒町一丁目的一部 昭和四三年四月二四日 佐久間小学校 地元有志 秋葉原東部連合町」
退路を確保しながら、老幼婦女子を真っ先に避難させたことにより、人々がすべての努力を傾注して防火活動に専念できました。神田の町では、平素から町会活動や祭礼を通して、親密な「共助」の姿勢が培われていたことも、町を火災から護った大きな要因となりました。





エピソード④ かん とう だい しん さい 関東大震災(1923年)

107歳・帝さんの証言

てん し こう りん 天使降臨

まだ、2011(平成23)年3月11日の東日本大震災ひがしにほんだい しんさいの前のごとです。私たちは90年近く前に起こった震災しんさいの話うかがを伺いに、107歳の日高帝さんひだかていの許もとを訪れました。美しい笑顔えがおで私たちを迎えてくれた彼女は、1923(大正12)年に発生した関東大震災かんとうだいしんさいの際、多くの負傷者ふしやうしゃの手当てみすかを自ら進んで行った女性なのです。

「あの時は、自分も命つとからがら勤め先から

横浜公園よこはまこうえんへ逃げたの。でも、目の前に身動きもできない怪我人けがにんがたくさんいるのよ。見ていられなかったわ。救援活動きゆうえんかつどうとかボランティアとか、そういう感覚かんかくじゃなくて。その時は、家で私を待っている家族よゆうのことを考える余裕むがむもなく、無我夢中ちゆうで手当てをしたの」

その場所は、横浜よこはま。現在の横浜公園よこはまこうえんでした。そこには多くの避難者ひなんしゃがおり、中には血まみれ



の人がいました。そんな惨状さんじょうにもかかわらず、
医者いんさや看護師かんごしを含む救護班きゅうごはんは来ませんでした。
それでも、負傷者ふしょうしゃが次々に公園に運ばれてき
ます。そこで、帝ていさんは数日公園にとどまって、
負傷者ふしょうしゃの手当ててづを続けました。

帝ていさんの身を粉こにして行く救護活動きゅうごかつどうに、周囲
の人も感動し、当時の新聞てんしごうりんに「天使降臨」とい
う見出しで記事になりました。誰もが、自分の身
を守ることに精一杯せいいつぱいだった時に、帝ていさんの姿は、
人々の目に神々しく映ったに違いありません。

母から受け継いだ心

もともと、困った
人を見捨てられない
性格だという帝さん。
一人で立ち向かう救
援活動は、精神力だ
けで乗り切れるもの
ではありません。そ
の根底には、母から
受け継いだ心があっ
たようです。



「子供のころ、私の母が、近所に困った人が
いると、食べ物を分けたり、お手伝いに行っ
たりしていたのをよく見ていたので、それが当
たり前のことだと思っていたのね、きっと」

107歳の現在でも言葉ははっきりとしてい
て、目が輝き、肌もとてもきれいなものには何か
秘訣があるのではと思い、体が丈夫になるた
めの秘訣を尋ねました。思い当たる節といえ
ば、女学生のころ、神奈川県綾瀬の自宅から厚
木の学校まで片道5キロメートル以上の道程を

毎日、歩いて通学していたことだといいます。

「当然、素足に下駄よ。ぼこぼこした道も、下駄
が足からはずれないように歩くのだから、足の
裏も、指もとても強くなるのよ。今の人たちも、
もっと下駄を履けばいいのに」

3月11日の東日本大震災を帝さんはどう感
じているでしょう。帰宅困難者の姿をどう見
たのでしょうか。いまこそ、帝さんの体験を皆に
知ってもらいたいと思います。



エピソード⑤ 東南海地震(1944年)

戦争に消された大震災

戦争に消された大地震

1944(昭和19)年12月7日午後1時35分、太平洋戦争の真ただ中に東南海地震は発生しました。南海トラフの浜名湖沖から紀伊半島南東沖にかけてを震源域とする海溝型の巨大地震(マグニチュード7.9)でした。地震と大津波による被害は、静岡、愛知、三重の各県を中心に住家の全壊1万7599戸、津波による流失3129戸、死者・行方不明者1223人を数えました。

伊勢湾の北部、名古屋市から半田市にかけての港湾地帯には航空機工場がありましたが、倒壊により多くの死者がでました。なかでも悲惨だったのは、戦時中の勤労働員によって働いていた中学生約160人が、倒壊した工場の下敷きになって亡くなったことです。

これらの工場では、当時「零戦」と呼ばれた戦闘機などを造っていました。工場の中で造られた航空機は、壁があつては外に出すことができません。そのため工場では壁を抜いてしまひ、わずかな柱だけで工場の建物を支えていました。そこに激震が襲ひ、たちまち倒壊し

てしまったのです。

また、紀伊半島の熊野灘沿岸には大津波が襲来しました。三重県の尾鷲には、高さ9メートルもの津波が押し寄せ、家屋548戸が倒壊または流失し、96人が犠牲になりました。

東南海地震は、これほどの大災害をもたらしたにもかかわらず、その実態は、ほとんど国民に知らされることはありませんでした。戦時中で、厳しい報道管制が布かれていたうえ、太平洋戦争の末期で、それも日本の戦局が日毎に厳しさを増している最中に起きた地震災害だったからです。新聞もラジオも、真相を伝えることができませんでした。

各地での戦闘に敗北して、多数の航空機を失ひ、それを補うための増産が急務だった中京地区の航空機工場が大震災で倒壊したことは、致命的な打撃でした。軍需工場の被災が外部にもれないよう、機密の保持が最重要課題だったのです。



国民には知らされなかった

日本の軍部は、このように震災をひた隠しにしようとしたのですが、アメリカはちゃんと知っていました。東南海地震による津波は、太平洋を横断して、ハワイやアメリカの西海岸にまで達したため、検潮儀（海面の昇降を測定・記録する器械）に記録されていたのです。また、マグニチュード8クラスの巨大地震となれば、地震の波は地球を回ります。アメリカだけでなく、世界の地震観測網が、日本での大地震の発生を捉えていました。

現実に、ニューヨークタイムズやワシントンポストなど、アメリカの大新聞は、日本の中部で大地震のあったことや、軍需工場が壊滅的

な打撃を受けたことなどを、大きく報道していました。しかし、日本国民には知らされなかったのです。





エピソード⑥ 福井地震(1948年)

非常時の大きな決断

自ら腕を切断して生き延びる

福井県北部の直下を震源とするマグニチュード7.1の福井地震は、1948(昭和23)年6月28日午後5時13分(夏時間)に発生しました。ちょうど夕食の準備時間ということもあり、多数の火災を併発して、死亡者3769名という甚大な被害をもたらしました。この地震で福井市の家屋の約79パーセントが全壊したといえます。

当時26歳で学校教員だった加藤恒勝さんは、

地震発生時に福井市中心部の劇場で映画を観ていましたが、逃げようとした際に左腕が倒壊した建物の下敷きになってしまいました。

映画館の人たちが、折れた柱を梃子にして梁を浮かせて加藤さんの救出を試みましたが、人力での救出は不可能な状態でした。

やがて、黒い煙とともに火災が迫ってきました。救出しようとしていた人たちは、一人二人



とその場を立ち去ります。命の危険にさらされた加藤さんは、決断を迫られました。そして、最後に一人残った映写技師に自らの腕を切断する決意を伝えたのです。

付近から斧を探して戻ってきた映写技師は、まず腰ひもで腕のつけ根を固く縛りました。余震のたびに締めつけられて痺れた自らの左腕に、加藤さんは斧を3回叩きつけました。しかし、腕は簡単には切り落とせません。血まみれになった加藤さんの左腕を、さらに映写技師が斧を10回あまり振るって、ようやく切断ができました。

自分の腕と引き換えに建物の圧迫から解放された加藤さんは、戸板に乗せられて救護医療所に搬送されましたが、戸板が揺れるたびに切断部を覆った布に血の泡が噴き出す状態で、命も危ぶまれました。しかし、「生き抜いてみせる」

という気力を失うことなく、苦しい治療に耐え、後に見事回復した加藤さんは、片腕を失いながらも教員の勤めを立派に果たしたのです。



不死鳥の如く

福井市は、この地震の3年前に米軍大空襲により全市の約95パーセントが焦土と化していました。さらに地震の1ヶ月後には豪雨が洪水をもたらし、僅か3年の間に空襲・地震・洪水と、三つの壊滅的な被害を受けましたが、その度に復興を遂げました。当時の福井市GHQ軍政部

の記録には「日本人の道徳感覚はすばらしい、ヒステリックな傾向はない」と記されています。たび重なる災禍にも負けずに福井市民が復興への努力を重ねた姿は、まさに不死鳥のようであることから、福井市のシンボルは不死鳥の図柄になっています。



てんめいあさまやまふんか エピソード⑦ 天明浅間山噴火(1783年)

かんばらむら よみがえった鎌原村

あさまやまふんか 浅間山の噴火

ぐんま ながの けんざかい
群馬と長野の県境でいまも火山活動を続け
ひょうこう
る標高2560メートルの浅間山。この山が江戸
なか
時代の半ば1783(天明3)年に大規模な噴火を
な
しました。この年の5月頃から山がゴロゴロと
ふんえん
鳴り、噴煙が空高く上がり、火山灰がたくさん
ふ
降り注ぐと、8月のはじめには本格的な噴火が
ふ
始まります。火口から噴き出した高温の軽石や
かざんばい かさいりゅう しゃめん もろ
火山灰が火砕流となって山の斜面を猛スピー
ドで流れ下りました。

ふんか ふもと かんばらむら ようがん
この噴火で麓にあった鎌原村は、熱い溶岩と
しはだ そ
山の地肌から削ぎ取られた岩などが入り混じる

ちよくげき う
岩なだれの直撃を受け、村全体が埋まり、466
な
人が亡くなりました。

あさまやま あがつまがわ
岩なだれは浅間山の北側にある吾妻川に入り
だいでいりゅう おそ たはた かおく
大泥流となって村々を襲い、田畑や家屋、そして
とねがわ こ
人々を飲みこんで、利根川に流れ込みました。
さいがい ぎせい
この災害では1500人もの人々が犠牲になりま
なきから えどがわ かわぎし
したが、その亡骸は江戸川の河岸にまで流れ着
いたといひます。そればかりではなく、空に高く
ま かざんばい ひざ
舞い上がった火山灰は太陽の日差しをさえぎっ
てんめい だいぎきん げんいん
たため、天明の大飢饉の原因のひとつにもなっ
たと言われています。

はくくつ いこつ 発掘で見つかった2体の遺骨

1979(昭和54)年にかんばらむら はくくつ
1979(昭和54)年に鎌原村の発掘が行われ
ました。村の小高いところにある観音堂へ続く
かんのだう
15段の石段を掘り下げると、その下には更に石
ほ さら
段が35段埋もれていて、その最下段のところ
う
で35段埋もれていて、その最下段のところ
さいげだん
で35段埋もれていて、その最下段のところ
せお せお かっこう いこつ
で35段埋もれていて、その最下段のところ
で35段埋もれていて、その最下段のところ
で35段埋もれていて、その最下段のところ

いこつ
2体発見されました。調査の結果、2体の遺骨は
せお
ともに女性で、背負われた人は45~60歳、背負
う人は30~50歳、お互いに血縁関係がないこ
けつえん かんけい
とがわかりました。

はくくつ せんもんか
当時、発掘に当たった専門家や村の人たちは、

岩なだれから逃れようとお嫁さんがお姑さんをおぶって必死に高台にある観音堂を目指したものの、途中で力尽きてしまったのではないかと推測しました。

江戸時代には大きな災害に遭って家族を失っても、村を離れて生きることは大変困難でした。自分たちが生きていくためには村を蘇らせるしかありません。残念ながら、お姑さんを背負って途中で倒れてしまったように、その思いを遂げることができない人もいましたが、鎌原村の生き残った91人の人々は、新しい家族を作り、子孫を増やして、村を立て直すことを決意しました。



苦労を重ねた村人の結びつきは大変強く、30年後にはようやく家も畑も元の3分の1ほどまでに回復しました。村人たちは災害から立ち直った経験から、何事にも打ち克つ力を得たのです。



エピソード⑧ 十勝岳噴火(1926年)



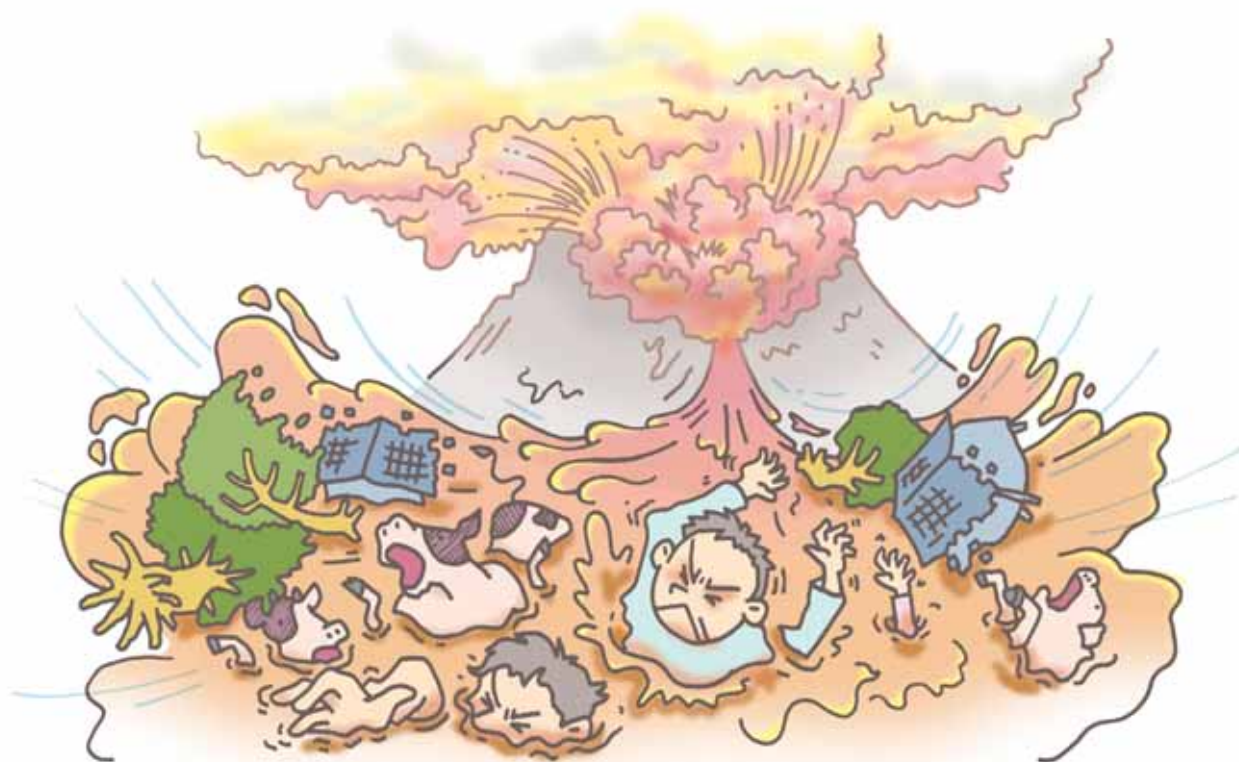
泥流に埋まった村を 蘇らせた村長

十勝岳が爆発

北海道の中央部、富良野盆地を囲む東側に
標高2000メートル級の大雪山十勝火山群があり
ます。十勝岳(標高2077メートル)はこの火山
連峰のひとつで、30~40年の間隔で噴火を繰
り返している活火山です。この火山が1926
(大正15)年5月24日に大爆発しました。1度目
は正午頃、続いて起きた午後4時17分の2度
目の大爆発によって新しく生まれた噴石丘の

半分が崩壊しました。高温の噴出物が山の斜
面の雪を溶かしながら泥流となって美瑛川を
流れ下り、畠山温泉を襲います。一方、富良野
川を流れ下った泥流はわずか25分で富良野盆
地に流れ着きました。

死者123名、行方不明者21名、建物372棟、家
畜68頭、それに豊かな恵みをもたらしてきた
田や畑5キロ平方メートル(500町歩)が一瞬



にして泥流で埋め尽くされてしまいました。
泥の深さは上流で6メートル、上富良野では
4メートルにもなったといいます。泥のなかに
深く埋まった人を掘り出し、流れてきた大量の

流木を焼いて処分することは大変な重労働で
したが、付近から青年団や消防団などが救援
に駆けつけました。

👉 絶望を希望に変える努力

多くの死者が出た上富
良野村は、30年ほど前に、
三重県から来た開拓団が
原野を切り開いてできた
村です。しかし、噴火によ
る泥流で土地は硫黄分
の強い泥に埋まり、作物
が実ることは期待できな
い状態になりました。

村の人々は、これから
の生活をどうしたらよい

のか迷いました。そんななかで、村長の吉田
貞次郎は村民を諭します。苦勞して開墾した
土地だから見捨てないで元に戻そうと村人を
励まし、政府や北海道庁などに働きかける努
力をしました。

吉田村長も三重県から15歳の時に家族とと
もに上富良野に移住し、35歳で村長となった
人望の篤い人です。村長自身もこの噴火で母
親を亡くしましたが、被災者の救援や救護、
そして村の復旧に満身の力を注ぎました。

吉田村長の村の再興への強い意志は、移住



を考へる人たちの心を動かしました。噴火の翌
年に苗を植えましたが、土に残る強い硫黄分
によって根を張ることもできません。しかし、村
人の努力で2年目には稲が根を張るところも
出て、耕作への希望が見えてきました。

災害を乗り越えるには人々が協力して、地
域の再生に向かって一緒に努力することが必
要ですが、また、いろいろな意見を持つ人たち
を一つの目標に向かってまとめていく人物も
欠かせないのです。

エピソード⑨ エルトゥールル号事件(1890年)



災害がもたらした絆 日本とトルコ

👉 村をあげての救援活動

和歌山県の潮岬は日本でも有数の「台風銀座」として知られています。岬の突端、大島の檜野崎には白亜の灯台がそびえ立ち、そこから望める太平洋にはゴつゴつした岩礁が連なっています。普段は穏やかなこの海が、今から120年以上前の1890(明治23)年、オスマン帝国(今のトルコ)の親善使節が乗った軍艦エルトゥールル号の海難事件の現場となりました。

9月15日、エルトゥールル号は台風シーズン真っ只中、帰国に向けて横浜を出航しました。その日の午後から風が強まると、夜半には大波を被り、船のメインマストが折れ、エンジンが停止し、流されるまま岩礁に打ち付けられて沈没してしまいます。海に投げ出された船員が、命からがら檜野崎の灯台に泳ぎ着きましたが、助かったのはわずか69名。500名余りが死亡する大惨事となりました。

灯台守は負傷したトルコ人に応急手当を施し、大島村の村長に事件を知らせます。村長は自ら現場で救援活動の指揮をとり、救援に駆



つけた村人は生存者を「カゴ」や「戸板」などに乗せ収容先に運びました。住民は総出で衣類を持ち寄り、サツマイモや卵、大切なニワトリまでも食料として提供しました。身体が冷えないよう、村人が懸命に温めたとも言われています。

事故から20日後、69名の生存者全員が、日本海軍の軍艦でトルコに送られ帰国しました。そして、生存者たちは、帰国後、自国でこの話を後世に伝えました。

大島村では、亡くなったトルコの人を丁寧に埋葬し、その後慰霊祭を定期的に行うようになりました。

☞ 助け合いの精神

時は下って、この海難事件から95年後の1985(昭和60)年にイラン・イラク戦争が勃発します。イラクのフセイン大統領は「3月19日20時以降、イラン上空を飛ぶ飛行機は民間機であっても安全を保証しない」との声明を出したため、各国はテヘラン在住の自国民を緊急脱出させるため、急遽、軍用機や民間機を派遣しました。しかし、当時の日本では、自衛隊機の海外派遣が出来ない上、日本の民間飛行機もテヘランには寄航しておらず、飛行機の手配ができなかったため、テヘラン在住の日本人は途方にく暮れてしまいました。

刻々と時間が過ぎるなか、トルコが日本人のために飛行機を増発する決断を下します。

「エルトゥールル号遭難の事故に際して、日本人がなしてくださった献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは決して忘れていません」

テヘラン空港にいた215名の日本人全員がイランから無事脱出。タイムリミットの約1時間前でした。国を越え、時を超えた「助け合いの精神」が両国の友好の絆を深めたのです。





エピソード 10 伊勢湾台風(1959年)

高校生の献身的な救助活動

最大級の台風被害

明治以来、最大の被害を出したとされる伊勢湾台風は、1959(昭和34)年9月26日の午後6時過ぎに紀伊半島に上陸すると、直径700キロに及ぶ地域を暴風雨に巻き込みながら本州を縦断、名古屋市南部を中心に5000人を越す死者・行方不明者を出しました。

この台風は、名古屋市内において最低気圧958.5ヘクトパスカル、瞬間最大風速45.7メートルの驚異的な数値を記録しています。低気圧は高潮を生じさせ、前日から降り続いた豪雨により河川が増水し堤防は決壊、名古屋市の南部地区を濁流の渦に巻き込みました。

とくに名古屋港周辺の貯木場から溢れ出た20万トンに及ぶ巨木の大量が、まるで狂ったかのように町を襲ったのです。この地区は一瞬にしてあちらこちらで人々の悲鳴や叫び声が聞こえほんとうに恐ろしい光景でした。



伊勢湾台風が与えた被害は甚大で、全壊家屋3万6135棟、半壊家屋11万3052棟、流失家屋4703棟、死者5098人、被災者数は全国で約153万人に及びました。

なお、この伊勢湾台風を教訓として、災害対策について定めた災害対策基本法が1961(昭和36)年1月に公布されました。

愛と力の筏

名古屋市南区大同町にあった大同工業高校
(現在の大同高等学校)の校舎は、当時完成し
たばかりの4階建てで、周辺には珍しい高い建
物でした。そのため台風当日の夕方から近隣住
民が続々と避難場所を求めてやってきました。

濁流によって1階は完全に水没しましたが、
校舎の3・4階を開放して、一時は2500名以
上の避難者を収容しました。その後、校舎の2
階を臨時の救援本部として、校長の指揮で生
徒と職員による救助隊が結成されました。校
舎周辺に流れ着いた材木で筏を作り「大同工
高生徒隊」と書かれた旗を立てて、全校生徒
は率先して人命救助や傷病者救護、また人員

物資の輸送に励んだのです。さらに生徒たち
は遺体の収容や汚物処理まで、一丸となって
力を合わせて献身的な活動を続けました。

その雄々しく危難に立ち向かい復興に尽力
した生徒たちの、まさに純粋な愛と力の姿に
多くの人々が感激しました。この若者たちの
勇気とボランティア精神を後世に残すために
「愛と力の筏」の銅像が作られました。災害は
時を経るに従って人々の記憶から忘れ去られ
ますが、我々はこの銅像を仰ぎ見るたびに、純
真な生徒たちが率先して若い力を結集した奉
仕の姿を忘れることなく、長く伝えるとともに
称えたいものです。



エピソード⑪ さか た たい か 酒田大火(1976年)



燃えつくした“風の町” しやう ぼう かつ どう 決死の消防活動

「風の町」酒田 さか た

松尾芭蕉の俳句でも知られる最上川は、山形県のみを流れる一級河川です。その流域には、上流の米沢盆地、中流の山形盆地、そして下流の庄内平野と、日本有数の穀倉地帯が広がり、日本海へと注ぐ河口近くは、江戸時代には北前船が寄港し、「西の堺、東の酒田」と言われるほど繁栄した港町・酒田市があります。

酒田は「風の町」とも言われています。その地形から強風が吹き荒れることが多く、ひとたび火災が発生すると、大火になることが昔からしばしばありました。

過去の大火を振り返ってみると、18世紀以降の300年間に、500戸以上焼失した大火が16回(そのうち1000戸以上焼失したのが7回)記録されています。明治

以降は、消防組織の充実や市民防災意識が向上したこともあって、100戸以上が焼失する大火は、ほとんど発生していませんでしたが、1976(昭和51)年、1700戸余りを焼失する「酒田大火」が発生しました。



☞ 強風で飛び火が発生

10月29日午後5時40分、酒田市中町2丁目の映画館のボイラー室から火の手が上がりました。観客20名は無事に避難しましたが、13分後に消防車が現場に到着した時には、風速12メートルを超える西北西の強風に煽られて吹き出した火焰が、またたく間に隣接の木造家屋などに燃え広がっていました。そして、強風により発生した大量の飛び火が、中町地区の商店街を襲います。

懸命な消火活動も火の勢いには力及ばず、日が変わっても火の勢いは衰えません。午前3時頃、それまで時折降っていた雨が強まり、午前4時頃には強風も収まったことでようやく火の勢いも衰えました。午前4時50分に市長に鎮火が報告され、午前5時に鎮火が宣言されました。

こうして12時間にわたる炎との戦いは幕を閉じたのです。

この火災では、酒田地区消防組合の消防長が亡くなりました。火災発生のお知らせを受けて火元の映画館に直行すると、危険を顧みず館内に進入して人命捜索にあたりましたが、不運にも煙に巻かれて殉職したのです。

多くの消防職員や消防団員が、強風の中、猛烈な火の勢い、飛び火、濃煙、有毒煙などが襲う過酷で危険な条件のもとで、延焼を食い止めるために、不撓不屈の精神で必死の消火活動を行いました。大火からの教訓は、今後の防災活動に役立てられ、以後、大火はこの地では発生していません。



と あつか さい がい がい よう 取り扱った災害の概要

1854 安政南海地震

安政東海地震の32時間後に発生した南海トラフ巨大地震。東海地震の西に隣接するエリアが震源域となった。被害は中部から九州に及び、大津波が沿岸を襲い、被害を拡大した。串本で波高15m、土佐の久礼で16mを記録。津波は大阪湾にも押し入り、無数の船が市内の川を遡上して橋を破壊し、大阪だけで341人の水死者。全域で、死者は数千。

1891 濃尾地震

わが国最大の内陸直下の巨大地震。根尾谷断層系の活動によるもので、地表に地震断層を生じた。断層変位は、水鳥(みどり)で上下に約6m、水平に約2m。岐阜市や名古屋市では大災害となり、岐阜では広域火災が発生、名古屋では、近代的な煉瓦造の建物が崩壊した。とくに激震に見舞われたのは、震源に近い根尾川、揖斐川の上流部で、多数の家屋が倒壊した。全域で、建物全壊14万余、死者7273人。また、大規模かつ広範囲にわたる山地災害となり、美濃地方だけで、約1万カ所の地すべりや斜面崩壊が発生。地震後の大雨により、二次的な土砂災害を発生させた。この地震を契機に、震災予防調査会が設立された。

1923 関東大震災

相模トラフで発生した巨大地震。東京、横浜などで、地震のあと火災が発生、折からの強風に煽られて広域火災となる。全体で死者・行方不明者10万5000人以上。死者の約9割は火災による焼死といわれる。広域避難場所だった被服廠跡には、火災旋風が襲い、約4万4000人が死亡した。家屋の全壊10万9000戸余、焼失21万2000戸余(全半壊後の焼失を含む)。

大津波が相模湾沿岸を襲い、鎌倉をはじめ沿岸で数百人の死者、熱海では波高12mに達した。山崩れ、崖崩れも多発、丹沢山地では、山地面積の約20%が崩壊。神奈川県根府川では、山体崩壊による岩屑なだれが白糸川の谷を流下して集落を埋め、289人の死者。根府川駅に停車していた列車が、地すべりに巻きこまれて崖下へ転落し、130人余が犠牲になった。

1944 東南海地震

南海トラフ巨大地震。静岡・愛知・三重の各県で被害が大きく、住家全壊1万7599戸、流失3129戸、死者1223人。伊勢湾北部の港湾地帯に立地していた軍需工場で、勤労動員の中学生が多数死す。静岡県下では、地盤の軟弱な太田川・菊川流域に被害が集中。長野県諏訪市でも、飛び地的な被害。津波が沿岸各地に襲来、熊野灘沿岸の被害が大きく、三重県尾鷲では、8~10mの大津波により96人の犠牲者。太平洋戦争末期の震災であったため、災害の状況は、殆ど国民に知らされず、「隠された大地震」とも言われる。

1948 福井地震

福井平野直下での断層活動による大地震。被害は、福井、丸岡から吉崎にいたる南北約15kmの範囲に集中。家屋の全壊率ほぼ100%の地域もあった。福井市も壊滅状態で、全壊率80%以上、火災も発生し、2000戸あまりが焼失。鉄道にも大きな被害。九頭竜川・足羽川の堤防が1~5m沈下し、各所で亀裂や崩壊を生じた。7月25日の豪雨により、九頭竜川左岸の堤防が決壊、福井市の約60%が浸水。

1783 天明浅間山噴火

8月4日、軽井沢宿に噴石が降下。吾妻火砕流発生。8月5日、鎌原火砕流発生。岩屑なだれが鎌原村を埋没し、死者466人。岩屑なだれは吾妻川に流入して、大規模泥流と洪水流が発生、死者1151人。

1926 十勝岳噴火

5月24日、噴火により火口丘が崩壊。岩屑なだれとともに、残雪が融け、大規模な泥流(大正泥流)が発生。上富良野村と畠山温泉で、144人の死者。

1890 エルトゥールル号事件

トルコ軍艦エルトゥールル号が、台風に遭遇して座礁。機関の爆発のために、和歌山県沖で沈没。500人近くが死亡したが、周辺住民の救出作業により69人の命が救われた。

1959 伊勢湾台風

それまでの最高潮位を1m近く上回る高潮によって、伊勢湾奥の低平地を中心に、風水害による犠牲者としては明治以降最大の5098人を出した。「昭和の三大台風」最後の台風。

1976 酒田大火

昭和51年10月29日夕刻、酒田市中心部の商店街で発生した火災。おりからの強風にあおられ、22.5haを焼き尽くした。これ以降、この大火を教訓として各地で火災対策がとられるようになり、大規模都市火災は姿を消した。

※災害についてより詳しく知りたい方や子ども達に教える方々等のために時系列に災害概要と共にまとめました。

あ と が き

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、多くの尊い命が失われました。亡くなられた方々に心から哀悼の意を表します。

私たちの住む日本は、自然的条件から地震だけでなく台風・豪雨など災害の多い国です。いわば、いつでも、どこでも誰でも災害にあう危険があります。地震や台風・豪雨などの自然現象は、人間の力では食い止めることができませんが、それらによる災害は、私たちの日々の努力や、備えによって減らすことができます。私たち国民一人ひとりが過去の災害を教訓としつつ、将来発生する災害に備えることが大切です。

この体験談集は、皆様方に災害について考えるきっかけとなることを期待して、政府の中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」で取りまとめた25の報告書と、専門各委員から新たに提供された資料の中から、災害時の体験談を分かりやすく取りまとめたものです。

この体験集をきっかけに災害について学んでいただき、平常から、「自分でできること」、「家族でできること」、「ご近所で力をあわせてできること」について考え、いつ来るかわからない災害に備えていただきたいと思います。

なお、「災害教訓の継承に関する専門調査会」で取りまとめた25の報告書、4編にわたる小冊子「災害史に学ぶ」〈海溝型地震・津波編〉〈内陸直下型地震〉〈火山編〉〈風水害・火災編〉は、内閣府ホームページでご覧いただけます。

平成24年3月

伊藤 和明

北原 糸子

清水 祥彦

平野 啓子

元「災害教訓の継承に関する専門調査会」

“その時”に備える



内閣府(防災担当)

発行：内閣府(防災担当)
〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2(中央合同庁舎第5号館)
TEL:03-03-5253-2111(代表)